

## 心理的時間に関する実験的研究 (10)

—— 持続音で呈示された「時間」のイメージ※ ——

甲 村 和 三

人文社会教室

(1988年9月3日受理)

### An Experimental Study on the Psychological Time (10)

—— Image of Time Evaluated After Hearing the Continuous Sound ——

Kazumi KOHMURA

Department of Humanities

(Received September, 3, 1988)

The purpose of this study was to investigate the emotional image of time as continued from our previous study. Image of time was measured by evaluating the 42 opposite adjective scales in the semantic differential method after hearing sound of each duration of 6, 18, and 38 sec.

Results were as follows: As a result of factor analysis, four factors were extracted. These were named as 1) mood, 2) evaluation, 3) activity, and 4) complexity, respectively. These factors were included in those extracted in our previous study. The image of time evaluated after hearing sound-duration of 6 sec were different in comparison with those of 18 and 38 sec. These tendencies showed to be pleasant in mood, short in evaluation, and stern in activity. As yet the image profiles of time after hearing the sound durations of 18 and 38 sec. showed to be valueless, static, long and tedious. These tendencies seemed to arise from wasting time under the passive situation such as merely hearing the monotonous sound.

These findings suggested that it was necessary to explore the image of elapsed time under the actual situation.

#### 問 題

「時間」には、事物・事象を秩序づける基本的概念としての存在時間ともいうべき時計的時間と、生活経験を通して意識される時間（体験時間などとも呼ばれる）とがある。心理学はどちらの時間ともかかわりを持っているが、本研究で扱う時間は意識時間に関するものである。本研究では「時間」のイメージについての分析を通じ、人々の時間観や時間の心理的属性とも言うべきものを明らかにし、さらには、そのようなイメージの形成過程についても追求することを主要な目的としている。

ところで、これまでの研究では主にSD法 (Semantic Differential Method) を用いて「時間」という語を対象としたイメージを調べ、大略、次のような諸点が明らかとなった (甲村 1985, 甲村・小笠原 1987, 1988)。

まず、「時間」概念が十分に獲得されているはずの大学生について、42反対形容語対によるSD評定では①「快適感情 (あるいは気分因子と呼んだ)」「時間的展望」「活動性」「確実性」「行動制約 (あるいは心気性因子と呼んだ)」「評価」「美的感情」と名づけた諸因子を抽出した。これらは、その後の検討により時計的時間成分と時間的感情成分とに分類できそうなのが示唆された (甲村・小笠原 1987)。②これら「時間」イメージの規定因子は時間的経験あるいは行動を通して獲得されたものであるが、「時間」イメージを形容語対のプロフィール偏向からみると、「時間」は〈大切で・気になる〉ものであり、〈速く・少なく・密な〉もの、さらに〈忙しく・厳しい〉ものという評定傾向が窺われた。これらの多くは、まさに我々が時間を意識する状況が有り余る時間的狀況ではなく、不足を感じる状況であることを示している。換言すれば、時間的有限性あるいは不足を感知するからこそ

※ 本研究は昭和63年度文部省科学研究費一般研究 (C) (課題番号63510053) による研究の一部である。

時間は<大切で・気になり・速く・少ない>とみる傾向が現出するものと思われる。また、これらの傾向は男女ともほとんど同一であったが、評定程度は女性の評定段階の方が男性のそれより著しく、感受性の性差を示すものと解された。③次に、難治性疾患である Duchenne 型進行性筋ジストロフィー患者の「時間」イメージについて調べたが、これには健常者について用いたと同じ42形容語対による S D 評定用紙が用いられた。治療法が確立されていない現在、患者にとっては健常者以上に時間は意識されるものと想像され、彼らの抱く「時間」イメージを適応機制との関係で吟味してみた。それによれば患者の「時間」イメージは S D 評定傾向においては健常者のそれと大差ないが、健康常者群に比して評定の中性的傾向が目立った。結果的には感性的鈍さを示すようであるが、他の諸検査結果と照らして、このような中性的反応傾向はむしろ気になるものに目をつぶるような意味での自我防衛的反応と見なして解釈された。④「時間」イメージの形成については20形容語対から成る S D 評定により高校1年生と大学1年生の結果を比較した。用いた形容語対は先の42形容語対による調査結果に基づき選定された。その結果、2, 3の形容語対を除くと、S D 評定傾向は年齢の差異も性別による差異もほとんどなく傾向全体が類似しており、僅かな評定の程度差を示すのみであった。大学生と高校生で平均評定値に統計的有意差が認められたのは<永遠の一はかない>のみであり、大学生の「時間」の「永遠性」イメージは高校生のそれを凌駕していた。なお、対象年齢をさらに下げて中学生の「時間」イメージについての調査は目下のところ継続中である。⑤同じ20形容語対による S D 評定を各種小児疾患患者にも実施した。喘息・Duchenne 型および非 Duchenne 型筋ジストロフィー・腎臓疾患・ノイローゼおよび心身症などの諸疾患児の「時間」イメージは高校生・大学生の健常者のそれと、比較され、また、疾患別にも検討された。健常群との間では「時間」イメージ・プロフィールの全体的傾向は少々はいたが、評定の量的差異を示した形容語対も<少ない・持続的な・抽象的な>において健常群は患者群の評定値を凌駕していた。結果から推論すると、行動制約の無い健常群の方が日常的活動と関係の深い時計的時間に関する不足感・持続感が強いことを示しているものと理解された。また、疾患別の検討では明瞭な群間の差異は認められず、資料の少なさも相俟って多くの検討は今後委ねることとした。以上のように「時間」という概念のイメージについては、評定対象が抽象的ではあったが、一応、素描することができたように思われる。しかし、「時間」経験の個人差の多様性から考えて、評定者全員に共通する現実の具体的時間体験についての検討を試みる必要もあろう。本研究

ではこのような考えから、時間体験の“濃度”を、一定時間中の負荷課題に対する受動-能動の次元で操作して、その経過時間に対するイメージをこれまでと同様の手法で吟味してみることとした。

## 方 法

S D 評定形容語対選定：S D 評定形容語対としては、先に「時間」概念のイメージ測定に用いた（甲村 1985）と同じ42の反対形容語対を用いる。

**調査対象：**心理学講義受講 1・2 年次学生を対象とし、有効資料の合計 112 人（男子 109 人，女子 3 人）。

**調査の実施方法：**講義終了後、S D 調査用紙を配布し、まず竹井機器製音刺激発生装置による純音（1000Hz）を30秒間聞かせ、その後、直ちに「今、聞いた持続音のイメージを42形容語対で評定（7段階評定）して下さい」との教示を与えて個別記入をさせる。次には「時間」のイメージを調べたい旨を口頭で伝えた後、同じ1000Hzの純音による6, 18, 38秒を1回それぞれ聞かせ、この3つの「持続時間」のイメージを調べる旨を教示する。この後、S D 評定を求めるが、まず18秒の持続音を聞かせ、「音で示した今の持続時間の印象についてのイメージを評定して下さい」という教示を与えてから予じめ配布されている S D 評定用紙に個別記入させる。以下、同じ純音による6秒の持続時間について、さらに38秒の持続時間について同様の S D 評定をさせる。なお、受講学年によって6秒と38秒の実施順序を入れ替えた。また、調査用紙の末尾には今聞いた音刺激の持続時間は何秒であったかを記入させた（言語評価法）。また、調査に際しては時計を一切見ないように予じめ教示した。

## 結果と考察

**結果の処理：**先の「時間」イメージに関する調査研究における同様のデータ処理を行った。即ち、まず、筆者および研究協力者により白紙あるいは作為的評定の行われた資料を除く作業を行った。その後、7段階 S D 評定に便宜的に与えた評定得点に基づき用いた3種の持続時間についての全データによる因子分析を試みた。これにより、音刺激で示された「時間」のイメージの規定因子を抽出するとともに、各因子別に持続時間の違いに伴うイメージ・プロフィールの差異などの検討を試みた。なお、因子分析は42の形容語対の内部相関行列から主因子解を求め、固有値1.00以上を基準に因子数を定める。それによって析出された因子について varimax rotation し最終因子解とする。なお、これらの計算処理には柳井・高木編著：多変量解析ハンドブック・ソフト（H A L

B A U ; 現代数学社刊) などを利用した。

### 結果と考察:

## I. 持続音刺激で呈示された時間イメージの因子分析結果

因子の抽出手順については結果の処理の箇所で記した通りである。本研究では因子分析の結果により42形容語対の分類を行い、これに基づいて3種の音持続時間の長さの違いに伴う「時間」イメージのS D 評定分析を行うことから、持続音による3種の「時間」イメージのS D 評定を合算した全資料について因子分析を行った。このような手順で抽出された最終因子解は4因子であり、各因子に含まれる形容語対の意味的内容から第1～4因子それぞれに「気分」「評価」「活動性」「複雑性」因子と命名した。表1は、便宜的に定めた |.400 | 以上の因子負荷量を示した形容語対を負荷量順に並べ替えて示した因子分析結果である。「持続音そのもの」のイメージも、また、持続音による3種の長さの「時間」イメージのS D 評定傾向の吟味についてもこの因子別分類を用いることとする。

表1 因子分析表

形容語対	I	II	III	IV	$h^2$
快い-不快な	-.727	.295	.084	.138	.641
美しい-醜い	-.722	.041	.042	-.108	.536
清らかな-濁った	-.681	.182	-.086	-.134	.522
うれしい-悲しい	-.668	.118	-.319	.113	.574
よい-悪い	-.658	.250	-.108	.064	.511
若々しい-老けた	-.611	.332	-.365	.033	.617
新しい-古い	-.607	.264	-.415	.300	.612
湿った-乾いた	-.594	-.348	.280	.185	.586
明るい-暗い	-.592	.241	-.231	-.009	.462
大切な-つまらない	-.554	.053	-.137	.097	.337
重い-軽い	-.534	-.415	.124	.093	.481
充実した-空虚な	-.532	.049	-.285	.258	.433
動的な-静的な	-.523	.348	-.330	.394	.658
寂しい-にぎやかな	-.521	-.068	.305	-.250	.431
豊かな-貧弱な	-.510	-.390	.036	.341	.529
気になる-気にならない	-.491	-.323	-.144	-.024	.367
なじみのある-なじみのない	-.475	-.051	.219	.137	.239
暖かい-冷たい	-.454	-.129	.145	.310	.339
忙しい-退屈な	-.452	.412	.425	.194	.593
永遠の-はかない	-.130	-.787	.073	-.001	.642
長い-短い	.432	.763	.093	-.091	.786
多い-少ない	.328	.702	.061	-.043	.606
大きい-小さい	-.004	-.693	.088	.119	.502
ふくらんだ-縮んだ	.020	.659	.330	.181	.576
広い-狭い	-.006	-.598	.219	.137	.425
遠い-近い	.343	-.556	.309	-.044	.524
きびしい-やさしい	-.037	.240	-.724	.011	.584
固い-柔らかい	-.032	.170	-.651	-.112	.466
鋭い-鈍い	-.460	.214	-.579	-.095	.602
急な-ゆるやかな	-.305	.430	-.516	.065	.549
速い-遅い	-.394	.427	-.497	.135	.602
強い-弱い	-.209	-.209	-.487	.224	.374
のんびりした-いらいらした	-.263	-.223	.479	-.024	.349
積極的な-消極的な	-.462	-.019	-.464	.300	.520
真つぐな-曲がった	-.238	-.012	-.463	-.419	.446
厚い-薄い	-.060	-.448	.011	.502	.456
複雑な-単純な	-.062	-.097	-.110	.475	.251
固有値	7.974	5.573	4.224	1.835	19.606
寄与率(%)	40.67	28.42	21.54	9.36	
累積寄与率(%)	40.67	69.09	90.63	99.99	

## II. 1000Hz純音そのもののイメージ

図1, 2, 3, 4, 5はそれぞれ「気分因子」「評価因子」「活動性因子」「複雑性因子」の4因子別に含まれる形容語対の平均評定得点プロフィールを示したものであり、これに4因子に含まれない形容語対を「その他の形容語対」として平均得点プロフィールを示している。各図には1000Hz純音に対するイメージ・プロフィールのほか、持続音による標準6秒, 18秒, 38秒の「時間」イメージ・プロフィールも併せて示してある。

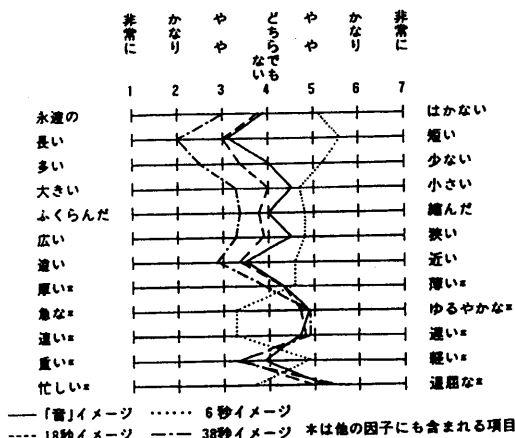
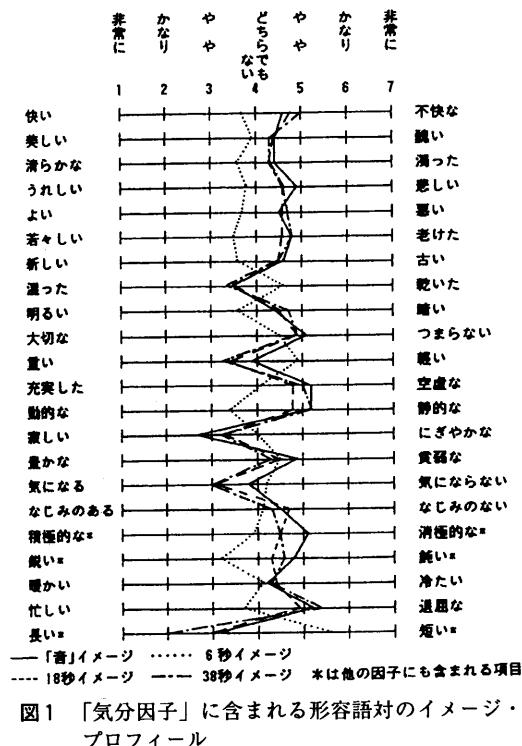




図3 「活動性因子」に含まれる形容語対のイメージ・プロフィール

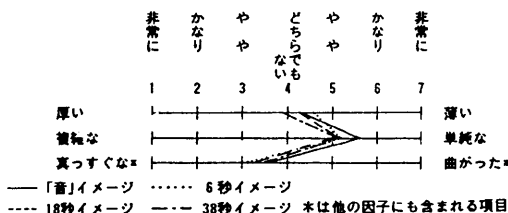


図4 「複雑性因子」に含まれる形容語対のイメージ・プロフィール

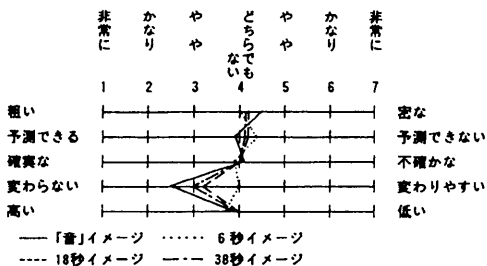


図5 抽出因子に含まれない「その他の形容語対」のイメージ・プロフィール

このうち、まず1000Hz純音に対するイメージについてみると、平均SD得点3あるいは4近くの、あるいはそれを越える評価偏向著しい形容語対を見ると、「気分因子」においては＜つまらない・空虚な・静かな・寂しい・退屈な＞という受動的・消極的な課題に対する感情と、静かで単調な音印象の評価傾向を窺うことができよう。何ら特別な心的準備なしで研究への協力を求められた状況で、同一振動数の、単に聞くだけの30秒の持続音に対する感情的応答としては正直な評価であろう。次に「評価因子」においては、＜長い＞とする偏向が見られ

る。これは音の“持続感”に対する評価傾向かもしれないが、結局は“音持続”の時間感の評価を表しているといえよう。また、「活動性因子」では＜鈍い・ゆるやかな・遅い・弱い・消極的な＞の諸傾向が見える。評価傾向は受動的、消極的な課題状況における態度傾向の現れと認めることができよう。さらに、「複雑性因子」およびその他の形容語対では、まさに＜単純な・変わらない＞とする印象傾向が著しい。

### Ⅲ. 3種類の音持続時間の違いによる「時間」イメージ

図1～5に示した持続音によって呈示された6, 18, 38秒の「時間」のイメージを各因子別に比較してみる。それによれば、各因子に含まれる多くの形容語対のほとんどについて標準6秒に対するイメージ・プロフィールに比して標準18, 38秒のそれはかなり異なることが明瞭である。また、単に評価段階の量的差異よりも評価の方向が拮抗的である形容語対も多い。まず、「気分因子」についてであるが、18, 38秒に対するイメージは総じて類似し、しかもこの因子に含まれる多くの形容語対は「持続音」そのものに対するイメージとも類似の傾向を示していることが認められる。標準18, 38秒の特徴的なイメージとしては、＜湿った・重い・空虚な・寂しい・気になる・退屈な＞傾向が窺われる。これらはいずれも“やや”程度であり、顕著な偏向ではない。また、これらの多くの傾向が「持続音」そのものに対するイメージと重なることから、「気分因子」に含まれる多くの形容語対に関する評価は、音で示した持続の「時間イメージ成分」もしくは時間イメージ評価における「音イメージ成分」の分離が実質的にはできていないことを窺わせる。ちなみに「持続音イメージ」と「18ないしは38秒」の平均SD得点間で統計的に有為な差が認められ、しかも「時間イメージ」評価値が「音イメージ」評価値を凌駕していたのは＜重い ( $p < .01$ )＞＜気になる ( $p < .01$ )＞のみであった[細かく吟味すれば、持続音イメージ評価値の方が標準18, 38秒に比して有意な偏向があったものとしては＜貧弱な ( $p < .01$ )＞がある。また、持続音SD得点と18秒あるいは38秒を個々に調べると18秒SD得点との間では＜空虚な・動的な・寂しい＞などに有意差が認められる。また、38秒との間では持続音イメージで＜貧弱な＞に有意差が認められる]。即ち、同じ持続音刺激を用いて、「音」と「時間」という評価対象の違いで気分的な差異を示したのが僅かな形容語対のみであったこと、あるいは標準の長さによる違いがいくつか見られたことから、元々、気分因子については当該事態の雰囲気やそこでの内面的な状況の影響を受けやすく、抽象的、観念的な「時間」そのものの印象より、具体的に呈示されている「音」に対する印象の方が評価対象としてより直接的であったということであろうか。

他方、6秒は他の標準に比べて“短い”ことで独自の気分的イメージがあるようである。18, 38秒との間では評定傾向が反対になる形容語対も多く、6秒イメージで言えば<快い・美しい・清らかな・うれしい・よい・若々しい・新しい・乾いた・明るい・軽い・動的な・気にならない・積極的な・鋭い・忙しい・短い>などの傾向が窺われ、長い標準とは評定傾向が逆転している。これらはいずれも18, 38秒平均SD得点との間で統計的有意差が認められた ( $p < .01$ )。単純な持続音を少なくとも18秒以上“待つて”聞くという受動的・消極的事態に対する拒否的反応の現れとみてよいであろう。

「評価因子」については、標準時間の長さの違いがイメージの違いとして比較的明瞭である。この評価因子についても標準18, 38秒は評定傾向類似で量的な差が顕著という傾向が見える。いずれも38秒の方が18秒イメージに比して<永遠の・長い・多い・大きい・ふくらんだ・広い・遠い>とする傾向が著しい。他方、標準6秒との違いは先の気分因子において見られたように、評定の方向性の違いとしても明瞭である。6秒について言えば、<はかない・短い・少ない・小さい・縮んだ・狭い・近い>といった傾向を示している。要するに、評定者たちは6秒と他の標準(音イメージ評定の場合も含めて)との“量的な”違いを明瞭にイメージの差として認めているということである。なお、この評価因子についての音イメージのプロフィールは6秒と18, 38秒イメージとの間にほぼ位置しており、しかも、評定段階としては“どちらでもない”という中性的位置に近く、結果から見て評定者たちは評価因子に関しては「音イメージ」と「時間イメージ」の課題分離をしているといえるようである。

「活動性因子」については、「音イメージ」と「18, 38秒時間イメージ」はほぼどの形容語対についても類似の傾向を示しているが、「6秒時間イメージ」とは評定傾向が拮抗する形容語対も多い。「6秒時間イメージ」について言えば、<きびしい・固い・鋭い・急な・速い>といった傾向が「18, 38秒イメージ」のそれらとは対照的である。活動性因子については、長い標準での音イメージとの区別が実質的には困難になるようであるが、消極的・受動的な事態でも6秒という時間的短さは“短い”という時間的成分が強調されるようである。

「複雑性因子」および「その他の形容語対」では、「音イメージ」と「3種の時間イメージ」、また3種の時間イメージにもほとんど評定傾向・評定段階の差異は認められない。ただ、「18, 38秒および音イメージ」で<変わらない>とする傾向のみが6秒イメージの“どちらでもない”程度を凌駕している。

#### IV. 持続音による「時間」イメージと持続時間の主観的評価値との関係

1000Hz持続音による「時間」イメージは標準時間6, 18, 38秒の3種類であった。これらに対する平均評価値(経過時間に対する言語的見積り=言語評価法による)は、それぞれ6.68秒 ( $s.d = 2.82, 11.31\%$  [過大視]), 20.41秒 ( $s.d = 15.32, 14.63\%$  [過大視]), 36.88秒 ( $s.d = 40.96, -6.28\%$  [過小視])であった。総じて短い標準の過大視、長い時間のわずかな過小視であり、単に持続音を聞いているだけの受動的課題負荷時の時間評価としてはこれまでの多くの知見と大差はないといえよう。また、相対評価値 [= (評価値-標準時間)/標準時間 $\times 100$ ] と42形容語対の評定傾向との相関行列を求めた(紙数の都合で表示は省略する)。時間評定値と各形容語対との間の相関係数についての検定(無相関検定)の結果、有意性が認められたのは次の形容語対であった。

6秒 [大きい-小さい ( $r = -.223, p < .05$ ), 複雑な-単純な ( $r = -.198, p < .05$ ), 忙しい-退屈な ( $r = -.194, p < .05$ )]

18秒 [長い-短い ( $r = -.190, p < .05$ ), 強い-弱い ( $r = -.186, p < .05$ ), 積極的な-消極的な ( $r = -.214, p < .05$ ), 真つすぐな-曲つた ( $r = -.219, p < .05$ )]

38秒 [永遠の-はかない ( $r = -.200, p < .05$ )]

このように、標準時間の長さによって時間評定値と形容語対の関係が異なり、また相関係数そのものも高くなく、結果的には主観的な時間評価値と持続音呈示による「時間」イメージとの間に一貫した傾向が見られたとは言いがたい。しかし、例えば、“長い-短い”と時間評価値の相関係数をみると、標準6秒;  $r = -.183$ であり、SD得点小(“長い”とするイメージ)ほど時間評価値は大となる傾向が一応認められ、観念的な時間経過の長さを実際の時間評価値との関係には矛盾はないという結果は窺うことができる。また、“速い-遅い”と“長い-短い”の相関係数は、標準6秒;  $r = -.319$ , 標準18秒;  $r = -.112$ , 標準38秒;  $r = -.337$ であり、標準18秒の低い相関係数は問題だが、概ね、“速い”は“短い”とイメージ結合し、“遅い”は“長い”とイメージの結合が認められた。しかし、先の調査結果(甲村・小笠原1987)におけるような.600を越えるような高い相関係数とは程遠いものであり、被調査者の違いも含めて調査事態の違いによっては「時間」の観念的なイメージに差異が生じる可能性を示唆する結果ではあった。

#### V. 先の「時間」概念の観念的イメージと持続音で示した「時間」のイメージ比較

図6は先の研究(甲村1985)における男子大学生(本研究の調査対象者がほとんど男子であることから対照群として男子大学生の資料を用いた)の「時間」概念の観念的イメージ・プロフィールに対して、本研究における



て、具体的に呈示され、評定者に共通の持続時間イメージ測定という本研究のような事態では予想される結果ではあった。

2. 1000Hz純音に対するイメージとしては、〈つまらない・空虚な・静的な・寂しい・退屈な〉といった単調で・静かな音に対してのイメージとともに、受動的・消極的な課題に対すると思われるイメージ傾向が認められた。データの再現性を求めるがための厳密な音条件ではあるが、聞く側からすれば、たとえ40秒近くの短い時間でも課題に対する ego-involvement は低いのかもしない。多くの資料を必要とする調査研究であるが、課題の設定の難しさとともに多数の評定者の協力が得られる状況設定はなかなか容易ではない。

3. 持続音により呈示された「標準時間」の長さの違いに伴う「時間」イメージの違いとしては、標準6秒と18・38秒の間の違いが明瞭であった。結論的には事態の単調さもあって、「気分」的には短い時間に対する好印象が強いということであった。「評価」の面では文字通り“短い”時間イメージ、例えば〈はかない・短い・小さい・縮んだ・狭い・近い〉の評定偏向が明らかであった。「活動性」の面でも6秒の〈きびしい・固い・鋭い・急な・速い〉に対して、18・38秒のイメージ〈やさしい・柔らかい・鈍い・ゆるやかな・遅い〉などはまさに対照的な評定傾向を示す形容語対であった。全体的な「時間」イメージの応答傾向からすると、6秒だからの評定というよりも結局は用いた標準時間間の相対的な長さ印象に規定されての評定傾向であると思われる。

4. 標準6, 18, 38秒に対する主観的な時間評価もイメージ調査と併せて回答させた。平均評価時間はそれぞれ6.68, 20.41, 36.88秒であった。短い標準で過大視、長い標準でやや過小視という結果であった。評定値の傾向は標準の長さに対する対数的変化を思わせ、一見、Weberの法則による説明の可能性を思わせるが、何にしても用いた標準が3種類だけであってこの問題に関する言及はこれ以上はできない。時間評定値と各形容語対の評定傾向との相関を調べたが、6, 18, 38秒と一貫して有意な相関係数が認められた形容語対は無かった。しかし、例えば“長い—短い”との間の相関係数をみると標準6, 18, 38秒でそれぞれ $-0.149$ ,  $-0.190$ ,  $-0.183$ であり、相関係数の検定では有意性は認められはしなかったが、傾向において“長い”とする者ほど評価値は大となる結果を示した。また、用いた形容語対間の観念的関係を相関係数によって調べたが、この中で最も関連のありそうな“速い—遅い”と“長い—短い”については、標準6, 18, 38秒それぞれにおいて $-0.319$ ,  $-0.112$ ,  $-0.337$ であり、検定結果では6, 38秒の場合について統計的有意性が認められた。しかし、標準18秒での相関係数

は低く、先の「時間」概念に対する観念的なイメージにおいて見られたような高い相関関係は本研究では見られず、本研究のように具体的な場面設定をしてそこで実際に経験した「時間」イメージを求めるといった調査状況では、必ずしも観念的あるいは通念的關係は成立しないこともあるということが示唆された。

5. 速いと短い、遅いと長いという「時間」の通念的關係イメージも含め、これまでの「時間」の概念に対する観念的イメージ・プロフィールは、本研究の実験経験した「時間」に対するイメージ・プロフィールとかなり異なる様相を示した。「評価」に関する面ではまさに標準の長さに規定されての評定傾向ではあったが、少なくとも「気分」的な面においては今回のプロフィールはまさにそこでの「過ごし方」イメージが表出されたといえよう。

「時間」はそれ自体、単独で存在するとは考えられない。時の刻みは時計が示す、それを知る者にとっての「時間」のイメージは「時計」のイメージとダブるであろう。一方、「時間」は「変化」のイメージともダブる。万物の変わりゆく様は「時間の流れ」を想像させる。「時間の流れ」は、また、それを感知する者にとっては「意識の流れ」でもある。「意識の流れ」は個人の「経験の過程」でもであろう。個人にとっての「時間」の意味は、結局はその時間経過の中で具体的に生じている「経験の意味」とダブると考える。それを探るには、操作された経験事態の下での「具体的な時間」イメージをより直接的に吟味することが重要であるように思われる。

## 文 献

- Gorman, B.S. & Wessman, A.E. (Eds) 1977 The personal experience of time, New York; Plenum.
- 伊東俊太郎 1980 存在の時間と意識の時間 [村上陽一郎編 時間 (所収) 東京大学出版会]
- 岩下豊彦 1979 オスグッドの意味論とSD法 川島書店.
- 岩下豊彦 1983 SD法によるイメージの測定 川島書店.
- 岸本末彦 1967 現代日本語における時間的表現 大阪教育大学紀要, 16, 1-12.
- 甲村和三 1985 心理的時間に関する実験的研究(7) — 時間の意味的構造について — 名古屋工業大学学報, 37, 7-14.
- 甲村和三 1986 「時間」概念の意味的構造 第50回日本心理学会大会発表論文集, p.310.
- 甲村和三・小笠原昭彦 1987 心理的時間に関する実験

- 的研究(9)ー健常学生群と比較した各種疾患者の「時間」イメージ名古屋工業大学学報, 39, 9-16.
- 甲村和三・小笠原昭彦 1988 Duchenne 型筋ジストロフィー患者の「時間」および「将来」に関するイメージの分析 心身医学, 28, no.4, 317-323.
- 中埜 肇 1976 時間と人間 講談社現代新書.
- Sherover, C.M. 1975 The human experience of time. New York Univ. Press.
- 滝浦静雄 1975 時間ーその哲学的考察ー岩波新書.
- 滝浦静雄 1975 時間の言葉 月刊エビステメ 12月号, 104-116, 朝日出版社.